

論文要旨

近年、人文社会学等において、物語に注目が寄せられている。ここで「物語」とは、いわゆる枕元で母親が子供に読み聞かせるような「物語」のみを指すのではなく、「(有意味な終点に向けて) 諸出来事を取捨選択し構造化したもの」を指す。こうした「物語」は社会構成主義において、人々の「現実を構成する」ものとして扱われている。また、心理学では、思考形式には二つの形式があり、一つが論理実証主義的な思考であり、もう一方が、物語的な思考であることが指摘されている。そして、この二つの形式が相補的であるが、互いに還元できない事が指摘されているのである。つまり、論理実証主義的な思考のみならず、物語的な思考を扱うことの重要性が指摘されているのである。ならば、「物語」が人間にとって重要なのであれば、社会的な営みである土木計画においても重要性を持ちうると思われるのである。

以上のような背景から、「物語」に関わる人文社会科学研究を包括的にレビューした。その結果、教育学や心理学をはじめとして、土木計画において重要な役割を担いうる可能性を見出し得た。そこで本研究では、土木計画における「物語」の役割について論じることとした。

土木計画における「物語」の役割とは、第1に、「プランニング」等で必要な知識を効率よく伝える役割であり、第2に、「プランニング組織」や一般の人々の倫理観を向上させ、社会の漸次的改善の素地を形作る役割であり、第3に、組織や地域や国の凝集性を高め、社会を漸次的に改善していく上で必要不可欠な活力を高める役割であり、第4に国や地域を悪しき方向へと向かわせる「ドミナント」な物語を、善き方向へと向かわせる「オルタナティブ」な物語へと置き換える役割であった。こうした役割に沿って、「物語」を活用することが土木計画、ひいては社会の漸次的改善に資するものであると考えられる。

本研究により、土木計画における「物語」の役割の一端が明らかになったと思われる。